

**[成果情報名] 促成イチゴにおけるヒラズハナアザミウマに対する各種殺虫剤の殺虫効果**

**[要約]** 2022年5月と6月に奈良県内の促成イチゴにおけるヒラズハナアザミウマの感受性検定を実施したところスピノサド顆粒水和剤の殺虫効果の低下が確認された。

**[キーワード]** イチゴ、化学的防除、補正死虫率、食害度

**[担当]** 環境科

**[分類]** 普及・行政・教育の参考となる技術情報

---

**[背景・目的]**

奈良県における促成イチゴ栽培では、2月下旬頃からヒラズハナアザミウマによる果実被害が問題になる。促成イチゴ栽培における本種の防除は化学農薬が中心であり、生産現場で発生する個体群の薬剤感受性を確認することは重要である。そこで、促成イチゴ生産圃場で発生しているヒラズハナアザミウマの薬剤感受性を調査する。

**[成果の内容・特徴]**

1. 香芝市と奈良市の2圃場から採集したヒラズハナアザミウマ成虫を用いて、インゲン初生葉を検定植物にしたプラスチック管瓶法(井村, 2012)で検定を行ったところ、スピノサド顆粒水和剤の補正死虫率は香芝市で18.5%、奈良市で81.2%であった(表)。スピノサド顆粒水和剤は2020年、2021年に県内9箇所のイチゴ生産圃場から採集した9個体群で行った調査では、いずれも補正死虫率98%以上を示していた。今回の調査で、県内で初めて殺虫効果の低下が確認された。
2. フルキサメタミド乳剤、アセタミプリド顆粒水溶剤の2剤は補正死虫率90%以上と殺虫効果が高く、食害度も低かったため、防除効果が期待できると考えられる(表)。
3. エマメクチン安息香酸塩乳剤とシアントラニリプロール油脂分散性水和剤の補正死虫率はそれぞれ70%以下、10%以下と殺虫効果は不十分だったが、食害度が低かったため、一時的な被害抑制効果は期待できると考えられる(表)。
4. フロメトキンフロアブルは補正死虫率が低く、食害度も高かったことから、防除効果は期待できないと考えられる(表)。

**[成果の活用面・留意点]**

1. 供試薬剤はいずれも2023年3月時点でイチゴに登録があるが、ヒラズハナアザミウマに対して登録がない薬剤も含まれるので、使用の際には登録の内容を確認する。
2. 殺虫剤感受性の圃場間差が存在する場合があるので、別圃場で発生した場合は別途検定を実施する必要がある。

## [具体的データ]

表 奈良県内のイチゴ圃場から採集したヒラズハナアザミウマ成虫に対する各種殺虫剤の殺虫効果

IRAC コード	薬剤名 (商品名)	希釈 倍率	香芝市 採集日:2022.5.24				奈良市 採集日:2022.6.7				
			供試数	死虫率±SE(%)	補正 死虫率 (%)	食害度 <sup>※1</sup>	供試数	死虫率±SE(%)	補正 死虫率 (%)	食害度 <sup>※1</sup>	
4A	アセタミプリド顆粒水溶液 (モスピラン顆粒水溶液)	2000	73	93.2 ± 3.0	93.2	0.5	-	-	-	-	-
5	スピノサド顆粒水和剤 (スピノエース顆粒水和剤)	5000	151	18.5 ± 3.2	18.5	3	71	81.7 ± 4.6	81.2	0	0
6	エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アフアーム乳剤)	2000	83	68.7 ± 5.1	68.7	0	-	-	-	-	-
28	シアントラニリプロール油脂分散性水和剤 (ベネビアOD)	2000	90	8.9 ± 3.0	8.9	0.5	-	-	-	-	-
30	フルキサメタミド乳剤 (グレーシア乳剤)	2000	68	100	100	0	54	100	100	0	0
34	フロメキンフロアブル (ファインセーブフロアブル)	2000	120	0	0	4	-	-	-	-	-

※1:食害度は、0(被害痕無し)、0.5(食害痕はごくわずか)、1(葉の1/4 未満に食害痕)、2(葉の1/4~1/2 に食害痕)、3(葉の1/2 以上に食害痕)、4(葉の全面に食害痕)の6段階で評価した

## [その他]

研究課題名：病虫害診断技術調査事業

予算区分・研究期間：病虫害診断技術調査事業（植物防疫事業交付金）・2022年

研究担当者：藤森颯太

発表誌等：関西病虫害研究会報 65 巻

## [引用文献]

井村岳男（2012）植物防疫 66：255-259.